

# 全国患者図書サービス連絡会会報

Vol.22 No.1・2  
(通巻 No.77)  
January 2016

## 目 次

### [報 告]

平成26年度活動報告 .....	i
平成26年度決算報告 .....	ii
平成27年度活動計画 .....	iii
平成27年度予算計画 .....	iv

### [講演要旨]

にこにこトマト できることは何でも —できないことも工夫して—	にこにこトマト	神田 美子.....	1
------------------------------------	---------	------------	---

#### 患者図書室の変遷と患者さんの意識の変化 from2003

青梅市立総合病院図書室	家田 史子.....	7
-------------	------------	---

#### 当院における患者図書サービスの現状と課題

千葉メディカルセンター図書室	成毛 モモ.....	13
----------------	------------	----

### [参加記]

#### 全国患者図書サービス連絡会講演参加記

獨協医科大学 図書館	森戸 重男.....	17
------------	------------	----

#### 本のちから

羽村三慶病院 理学療法士	寺島 祐.....	18
--------------	-----------	----

### [本の紹介]

#### 東邦大学医学メディカルセンター

大橋病院図書室	牛澤 典子.....	20
---------	------------	----

### [コラム]

「子どもには、ほんとうの生命を」	国立富山病院 院長	嶋 大二郎.....	24
------------------	-----------	------------	----



全国患者図書サービス連絡会

年次報告

## 〈報 告〉

# 平成26年度 活動報告

### 1. 総会と講演会

- 1) 第21回総会を平成26年6月28日(土)に雑司ヶ谷地域文化創造館第1会議室Aを会場に開催した。総会後の講演会では、[第1演題]は北里大学薬学部非常勤講師の浅野マリ子氏による「ベッドサイドに図書を届ける；図書を通して患者さまとの関わり」、[第2演題]は静岡県立こども病院医学司書の塚田薫代氏による「こども目線の連携；小児病院の現場から」の内容で開催した。
- 2) 当連絡会主催の講演会を平成27年2月7日(土)に日本図書館協会研修室にて開催した。[第1演題]は専修大学文学部図書館情報学教授の野口武悟氏による「わが国の特別支援教育と図書館の障害者サービス」、[第2演題]は神奈川県立精神医療センター医師の加藤秀一氏による「児童精神科医からみた読書療法の可能性」の内容で開催した。

### 2. 役員の欠員補充人事

- 1) 役員の欠員補充のために磯野 威氏と伊藤友香氏の2名を新役員として任命した。

### 3. 会報の発行

平成26年度は20巻4号から21巻4号を発行した。

当連絡会の会員が全国に散在しているため、会員の動向や論文・事例の寄稿原稿とともに自主講演会の内容を積極的に掲載した。

### 4. 広報活動と関連活動

日本図書館協会発行の図書館年鑑に平成26年の活動内容を執筆した。

会報の総目次をホームページ上で閲覧できるようにした。

### 5. 当連絡会の活動方針の見直し

設立20年目を迎えるに当たり、活動方針や会則の見直しを行い、会則の改正を行った。



# 平成26年度 決算報告

平成27年6月30日現在

平成26年度会員数 81名

## [収入の部]

費目	予算額	収入	増/減	
前年度繰越金	254,382	254,382		
27年度 会費	316,000	64,000	64,000	4000x16
26年度 会費	260,000	208,000	-52,000	4000x52 (未納13会員)
賛助会員費	60,000	60,000	0	@30000×2社
総会講演会参加費	20,000	25,000	5,000	@1000x19+@1500x4
講演会 参加費	33,000	32,500	-500	@1000x13+@1500x13
会報掲載広告料	10,000	10,000	0	会報20巻3-4号
銀行利息		2	2	
その他				
合計	953,382	653,884	-299,498	

## [支出の部]

費目	予算額	支出金額	増/減	
<b>I 会報発行費</b>	245,000	111,312	133,688	
印刷費	35,000	91,000		会報 20巻4号
	140,000			会報 21巻1号, 2・3号(送金手数料共)
会報発送費	50,000	15,484		会報 20巻4号 21巻1号
[定期発送費]				
諸費	20,000	4,828		会報20(4)ー21巻4号執筆・校正依頼等
<b>II 講演会費</b>	150,000	175,692	△25,692	
講演会講師謝礼	130,000	91,000		6月講演会浅野氏謝礼・交通費 2月講演会加藤氏謝礼・交通費
講演会会場費	10,000	41,598		2014.6月総会・講演会会場諸費 2015.2月講演会会場費・諸費(含振込料) 2015.7月講演会会場費・諸費(含振込料)
3. 講演会/関係諸費	10,000	43,094		講師案内・講師派遣依頼・懇親会等諸費・ 配布資料コピー代
<b>III 総会費</b>	20,000	984	19,016	
<b>IV 役員会費</b>	30,000	18,890	11,110	10月役員会会場費・交通費・資料代等
<b>V 事務局費</b>	70,000	90,976	△20,976	
1. 事務用品		76,202		PC一式購入費・封筒他事務用品等
2. 会費請求・督促送料		2,870		
3. 通信・交通費		2,510		
4. その他諸費		9,394		平成25・26年度会費請求書コピー代等 広告掲載料振込加入者負担料
<b>VI ホームページ維持費</b>	10,000	6,713	3,287	
<b>VII 会員名簿作成諸費</b>	10,000		10,000	
<b>VIII 予備費</b>	122,382	10,838	111,544	会報BackNumber製本費他
合計	807,382	415,405	541,977	

平成27年6月30日現在	収入	支出	繰越残高
	653,884	415,405	238,479

ゆうちょ銀行 振込預金 225,713  
 三菱東京UFJ銀行 普通預金 12,766  
 残額合計 238,479

### <会計監査施行>

1. 期 日:平成 27年12月18日
2. 場 所:磯野自宅(練馬区桜台1-37-18)
3. 監査報告:平成26年度経理執行につきまして、金銭出納簿、各領収書類および預金通帳との照合の結果、いずれも正確適正であり、計画に沿って施行されていることを認めます。

監 事 磯 野 威 (印)



## 平成27年度 活動計画

### 1. 講演会

- 1) 平成27年7月4日(土)に日本図書館協会研修室を会場に講演会を開催した。[第1演題]は、にこトマ文庫の神田美子氏による「できることは何でも～にこトマ20周年を迎えて～」、[第2演題]は青梅市立総合病院の家田史子氏による「患者図書室の変遷と患者さんの意識の変化 from2003」、[第3演題]は千葉メディカルセンターの成毛モモ氏による「当院における患者図書サービスの現状と課題」の内容で開催した。
- 2) 当連絡会主催の講演会を、平成28年2月を目途に開催するための準備を進めている。

### 2. 役員の欠員補充人事

平成26年度は2名の新役員を補充したが、さらに1名の補充を行いたい。

### 3. 会報の発行

平成27年度は22巻1号から22巻4号を発行する。

当連絡会の会員が全国に散在しているため、会員の動向や論文・事例の寄稿原稿とともに自主講演会の内容を積極的に掲載したい。

### 4. 広報活動と関連活動

日本図書館協会発行の図書館年鑑に平成27年の活動内容の執筆を予定している。

### 5. 特別企画

役員有志による特別企画「初冬の富山、きときとツアー!!」を準備している。開催は12月5日～6日を予定している。

## 平成27年度 予算計画

### 収入の部

費 目	予算額	
前年度繰越金	238,479	
27年度 会 費	260,000	(@4000x65) 会員81名のうち前年度納入済16名)
26年度 会 費	52,000	(@4000x13)
賛助会員費	60,000	@30000×2社
総会講演会参加費	20,000	総会講演会@1000×20
講演会 参加費	33,000	講演会@1000×30+1500×2
広告掲載費	15,000	22巻1-4号(1-2号合併号)
<b>合 計</b>	<b>678,479</b>	

### 支出の部

費 目	予算額	
<b>会報発行費</b>		
印刷費	35,000	21巻4号
	140,000	22巻1-4号
定期発送費	50,000	送料21巻4号・22巻1-4号
諸 費	20,000	
<b>講演会費</b>		
講演会/講師謝礼・交通費	180,000	講師謝礼/交通費
講演会会場費	30,000	
講演会/関係諸費	10,000	案内発送費/資料作成費/講師接待費
<b>総会費</b>		
総会関係事務費		案内発送/議案書作成費等
<b>役員会費</b>	30,000	会議室料・資料代等関係諸費
<b>事務局費</b>	100,000	事務消耗品費・会費請求/督促送料 事務局用PC代・通信費等
<b>ホームページ維持費</b>	10,000	インターネットサーバ使用料・ ドメイン使用料(23年分)連絡会HP用
<b>会員名簿作成諸費</b>	10,000	会員にのみ配布
予備費	63,479	
<b>合 計</b>	<b>678,479</b>	



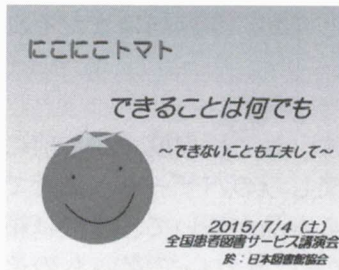
全国患者図書サービス連絡会

講演会報告

〈講演要旨〉

にこにこトマト できることは何でも～できないことも工夫して

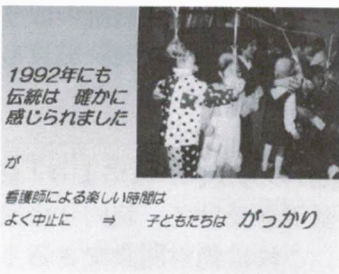
にこにこトマト 神田 美子



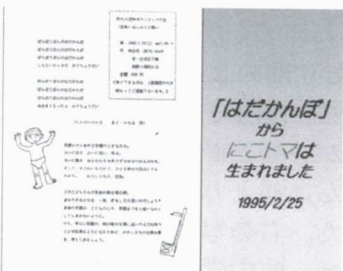
皆さま、こんにちは。京都より参りました、京大病院小児科でボランティアをしております「にこにこトマト（通称:にこトマ）」の神田と申します。この3月まで代表を務めていましたが幸運にも新代表にバトンタッチができ、この秋のにこトマ20周年記念事業の実行委員長にウェイトを置いて活動しています。本日は、前半を私たちの活動の始まりから今日までの20年の歴史と、後半では、活動の中の本への思いや文庫活動のようすをお伝えできたらと思います。



私には娘が二人いるのですが、1992年6月のある日、小学校から小5の娘が体育の時間に気を失ったと連絡があり、それがきっかけとなり京大病院に緊急入院しました。医師から小児がんで一年の入院が必要と言われた時は、何が娘に起こっているのか理解ができませんでした。しかし、「大学病院は『病気さえ治せばいい』考えに違いがない」と怯えながら入院してみると、意外にも少し違う感じがしました。後日、小児科100周年記念誌の中に、明治大正時代のクリスマス会や、院内学級のない時代の小児科が自主的に小学校を作っている写真を発見した時は、にこトマの活動が根付けたのは、この事実があつてこそだったのだと確信しました。子どもの生活への視点が、伝統的に医療の中に組み込まれていたのです。



入院当時の病棟の状況は、生体肝移植が頻繁に行われ始め、また骨髄移植も盛んな時期だったので、医療スタッフの過酷なほどの忙しさは、患者家族にとっても手に取るようにわかりました。しかし、そんな中でも看護師による毎日のお楽しみ企画がありました。緊急入院などで何度も中止になると、子どもたちは大人に不信感を募らせていました。親の自分にでき、医療の邪魔にならず、みんなが喜ぶことはないのだろうか、と私は考え始めました。そして入院中に、友人・知人にコンサートやおはなしの会を頼み、個人活動を開始しました。退院2年後、続けていた個人活動を基盤として、にこトマというグループを立ち上げました。何かに突き動かされるように必死でした。ビラを配り、賛同した25人で活動の充実を図るため、とりあえず1000円ずつ集めて25000円でスタートしました。実は、にこトマの運営は発会当時から今に至るまで、会員という枠を越え子どもたちに応援が届くようにとカンパ制なのですが、事務局を3人として自分は代表にな





り、事務局を自宅としました。1995年2月25日。阪神大震災のひと月あまりたったころ、「ボランティア」という言葉に違和感がなくなり、耳に馴染みだしたころです。初期は、家のカメラもワープロも使うという公私混同も甚だしいスタートでしたが、そうするしかない状況でした。人が集まり、細かい作業からバザーなど大掛かりな準備もすべてやりこなしました。楽しかったけれど、娘たちはこの中で育ち、気づいた時には写真のような状態になっていました。家族の平和のためにはまず倉庫を病院内に、と何年もかけて病院にお願いし、後日ついに院内に広い倉庫をいただくことができましたが、事務局はまだそれから5年後の2005年まで家にありました。



これは最近のバザーの様子です。晝2枚程度で20年前に始めた患者とご家族のためのお楽しみのバザーも、最近では退院したご家族や近所の人からも品が届いて、今では箱でいうと50箱以上になっています。きれいで安いものを見、気に入って買って手に入れられたら、よいストレス発散になります。カンパで運営している活動にも資金となり、また残りをスタッフが買えるので、準備に時間をかけてもだれもが楽しい作業です。品物はきれいにラッピングし、安全でおしゃれなバザーにしています。



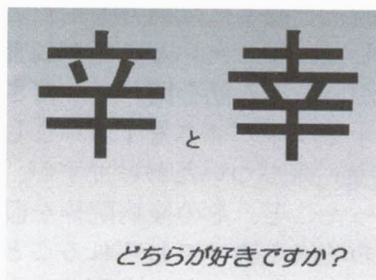
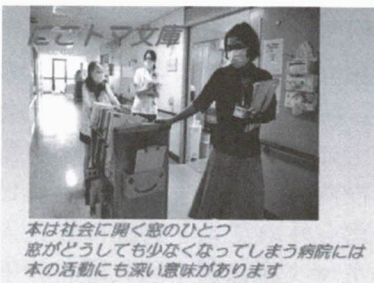
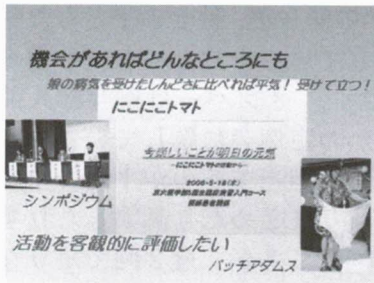
さて、草創期の私たちと病院の関係です。ボランティア制度は私たちの存在がきっかけとなって1997年に京大病院に導入されましたので、このポスターは、まだ身分の確定しないにこトマが、病院主催のコンサートを手伝った時のものです。京大の自由さの表れとも言えそうですが、ポスターにはトマトマークがついています。演奏者を紹介し、司会を事務局スタッフが担当しました。結果、病院の取り組みを称賛する記事が各新聞紙上に掲載され、病院職員も患者さんたちも喜ばれて、私たちも喜びました。



後日、コンサート担当の事務職員の方が、かねてより「京大病院に院内学級を作る会」の要望を受けて、院内学級設立の担当になられると聞いた時、これは絶対開設できる！と直感し、会の方に大喜びで連絡を取ったのは、良い思い出です。ボランティア制度導入以前に、にこトマを信頼し、トマトマークをポスターに入れてくださった職員の方の度胸に感謝です。今では当たり前のように毎朝子どもたちは学校に通っていますが、できる前に「教育委員会に、ご両親の要望があるという事実が必要だからご協力を」と患者家族に呼びかけても、皆さんにゆとりがなく、お一人来ていただくだけでも大変でした。右の写真は、当時の校長先生と院長先生の「せっせっせ」院内学級の学習発表会での特ダネです。この空間には病院ではなく、成長する子どもたちのための温かな空気が漂うようになりました。



初期は家にあるもので間に合わせたと言っても、プレイルームで使いたいものでも家にないものもあります。このころ子どもたちは、背の高い会議机か床の上で作業をしていたので、お金ができると、急いで木の机を3つ買いました。病院からはいただけたとしても金属的なものだから、プレイルームが優しい雰囲気になるように、と自力で買いました。今でも許可を得た上で、病院に甘えずぎないよう物はなるべく自分たちで揃えます。

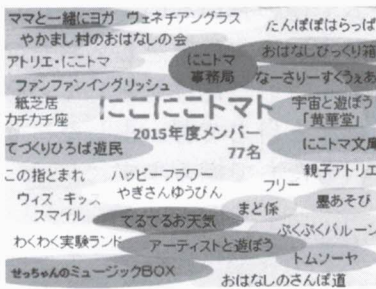


活動が動いていると、珍しがられて取材が入り、その記事を見て病院も活動が医療に踏み込まないで子どもたちの笑顔が生まれていることを知り安心されたのかもしれませんが。評価を求めず活動を客観的に見てきたことは、活動の継続の大きな要因だったのではないかと今振り返り思います。そうなるために、シンポジウム、学会、講演、講義など求められれば受け、活動を人前にさらす勇気が必要でした。1998年には、アメリカの病院視察にも出かけました。自費出張はボランティアにとって痛手な出費でしたが、その折に知り合った多くの医療者や子ども関係者と交流が続き、後々の広がりにつながりました。2009年には京大院生二人に「にこトマ君大研究」と名づけて研究をして頂き、共に活動を分析しました。

子どもの育ちは、入院中であろうとなかろうと止まることを知りません。良い刺激、良いかわりとなれるよう周囲の大人が少し工夫をすれば、入院中でも、痛い・辛い時間ばかりではなく、子どもたちは「楽しく豊かな時間」を過ごすこともできます。病院職員でないからこそ、近所のひとや街にいるひとだからこそ、煮詰まったような入院中の関係に、別の価値観を持ってそよ風を運ぶことができます。お琴、民族楽器、沖縄民謡、バレエ、狂言、観望会など、私たちにとってもなかなか機会がない珍しいものや、ごく日常のおはなしの会や工作の時間が子どもたちの育ち、選ぶという力、センスを育てて行きます。さてさて、「辛」と「幸」このふたつはとてもよく似ています。ほとんどの人はたぶん「幸せ」が好きだと思いますが、こればかりは絶対とは言えないほど人は状況で変わります。けれど、幸せの中に辛いという字が入っている、つまり辛いに少しだけ誰かが何かを足せば、それは幸せになるということに気づいたとき、何かが腑に落ちました。何も困ったことが起こらない、自分の力だけで生き抜けることが私の思う幸せではなく、辛いことに自分や誰かが何かを足してくれることを幸せというのではないかと思ったのです。

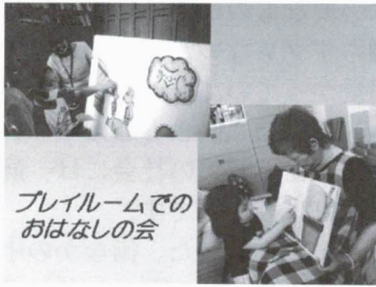
しかし、辛いことは嫌いでも、発病や入院当初は誰でも辛くて子どもの前でこそ泣かなくても、涙を流すことでしょう。そんなときはそのままにしておいてほしいものですが、その時期を過ぎて入院に慣れて、生活をそれなりに充実させたいと思っても、現実には病院ではよいチャンスが溢れてはいません。「ここは病院ですから」と、納得のいかない制限を加





えられたという経験は、多かれ少なかれ入院した経験のある人にはあり、楽しんではいけない、笑えば不謹慎とされる場所としての病院のイメージができあがっていったのかもしれませんが。京大小児科のプレイルームでは、にこトマの活動が平日のほぼ毎日に何らかの催しをしています。これで十分だとよくほめていただくのですが、私は、たかだか1日に1, 2時間の催しが、社会の子どもたちとチャンスが同等だとは決して思いません。もっと選べるほど増え続けてほしいです。メンバーは例年80人前後、この図の中にあるどこかの定例会に属しています。自分の得意分野で月に1回程度担当するのが平均です。事務局もこの一つの会で、取りまとめたり調整したりする役目をしていますが月1回どころか、週2回で足りない仕事を家でもこなさなければなりません。定例会の一つ、プレイルームから出て病室の子どもたちに本を届ける活動のにこトマ文庫をご紹介します。皆さまには本の意義など説明は不要ですが、特に子どもにとっては社会との接点がかもともと少ない上に、治療期間も長いことが多いことから窓としての本の役割が欠かせません。テレビや見舞い客も窓です。どの窓も外の空気を病院に取り入れてほしいものです。にこトマ文庫は週1回火曜日の午後にブックトラックに載せた約400冊の本と一緒に各病室を廻ります。子どもに3冊、大人に3冊で2週間借りることができ、読み終えた本は、プレイルームの返却箱に2週間以内でも返せます。314冊で開始した文庫も、今では蔵書数3000冊となっています。担当者は17人です。月1回、3, 4人が交代して当たります。

このにこトマ文庫は、5周年を記念して始めました。入院前に地元の子どもの文庫に関わっていた経験があるので、私の理想は本当は移動図書館形式を望んでいたのですが、当時は信用度も低く病室を廻るには実力不足だと思い、本の購入助成を申請していました。ところが調査に来られた伊藤忠財団の方がいろいろ話を聞いてくださり、「今でもできるのでは？」とアドバイスを下さいました。「では！」とこの方の言葉に飛びついたわけですが、この時に背中を押して下さったこと、その後病院枠を設けて財団が今でも文庫活動の助成を続けておられることに、心から感謝しています。にこトマでは、本関連の会が4つあり、またその他の会でも紙芝居や本も扱うので、週に1回以上のおはなしの時間があります。たいていの会では、おはなしに加えてちいさな工作もしていて、子どもたちはできあがった作品をベッドサイドにおみやげと



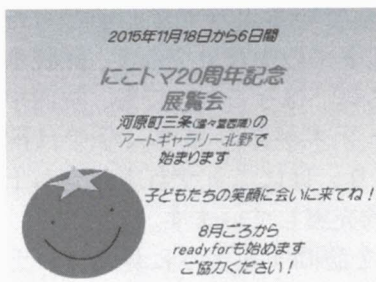
して持ち帰り、続きも楽しんでいるようです。子どもたちへの本のチャンスは、にこトマの中だけでなく、病院全体の図書コーナー、本のひろば「ほっこり」でも、院内学級の本棚でも、多種のチャンスがあります。今では関わっていませんが、「ほっこり」はにこトマ有志が立ち上げたので、子ども本は比較的充実しています。

にこトマ文庫は気楽に病室を訪問するようになって、とても繊細な仕事です。図書館に集まってくる本好きの子どもと違い、体調が悪かったり、処置中だったり、なかには本に無関心の子もいるので、担当者はドアをとて用心深く開けて中へは入らず、利用者に負担をかけないようにします。子どもたちが本を選ぶときは焦らせず気長に待つことも大事で、本の環境を全く持たない家族がいたとしたら、子どもは本を借りたい様子でも、親が不要だと主張すれば、その親子関係に立ち入ることも遠慮しています。

本は戻って来たとき、また手渡すときにはアルコールで消毒します。ときには、体力のない、意識のないターミナル期の子どもを訪問するのがとても辛いという文庫担当の声を聞くことがあります。しかし、事務局にいただくお子さんを亡くされた方からのお手紙には「わが子に何ももうしてやれない、と親として情けなかったのですが、本のおかげで最期まで子どもに読むという仕事ができ感謝です」とあり、そのお話しをします。本の活動は地味でも、人を介して温かさが伝わる病棟に必要な窓です。

文庫を始めて10年目の2010年。15周年記念として、にこトマ文庫をさらに充実させたいと、伊藤忠財団の病院粋文庫助成に再度応募しました。ブレイルームは家庭のリビングのような柔らかな、病院ではない雰囲気であってほしいので、まず病棟に本棚を寄付し、にこトマでの使用許可を得ました。府立のある高校に制作を依頼し、総ヒノキの開架式本棚を生徒さんと先生が運んできた途端に部屋が華やいだのは嬉しかったです。この本棚のおかげで、高学年の、特に男子が、好きなときに大人っぽい本や病気関連の本を気楽に借りられるようになりました。病室を廻った後、スタッフステーションの前に戻って来たブックトラックに、子どもやご家族が集まって、しばし本談義が始まることがあります。日常的にこんな時間があるのは、とても自然で贅沢な雰囲気です。しかし、入院している子どもたちのことも、にこトマの活動も、人に知られなければ、社会の応援の手は伸びません。自分たちが病院にそよ風となって吹くだけでな





く、許される範囲で、病院に必要なものは街に知らせなければなりません。活動は、偏らずブレないだけでなく、子どもたちを自分たちだけが可愛がっていてもいけないと思います。病院の子どもたちと社会を結ぶ働きも加えなければ、いずれ子どもたちが復帰する器としての社会には、病気の子どもへの理解も持っていてほしいのです。

そこに、チャンスが偶然にも巡って来ました。街なかの中堅のホテルからの申し入れで、実施させて頂いたギャラリー展示は4回にもなりました。この経験は、今秋の20周年記念展の実施に結びつきました。

子どもたちの作品を、ホテルに飾って遜色のない状態にするためには、額を新調し、写真や作品が最大に映えるように配慮をしました。あんまりよい作品が生まれたので、2010年の15周年記念に、小児科前エレベーターホールを「小児科ギャラリー」と名づけて、当初はホテルの作品を展示し、それらを返却した後は、次々生まれる書や絵を取り換えながらこのギャラリーに展示しています。エレベーターを待つ大人の患者さんや医療スタッフが、足を止めて「いいねえ、元気が出るねえ。子どもたちも頑張っているんだから、自分も頑張らなくて」という声が聞こえます。このようににこトマの活動に意義があるならば、今後の継続をどのようにすればいいのだろうか？という難題は、始めた当初から私の前に立ちはだかっていました。自分の限界まで続け、もし急にできなくなって次世代がいなければ、にこトマは消えてしまいます。それには甘んじて、子どもたちから「楽しく豊かな時間」は奪ってはいけません！そんな折、20周年を前に、「この活動は必要。続けなければ」と高谷さんが事務局に入って来られました。高谷さんはお子さんにとこトマを体験して必要を実感し、天国のハルちゃんも望んでいるだろうから、と重い役目を交代してくださいました。ちいさく始まったにこトマの活動も、とにかく一生懸命続けていたら、多くの方の手が伸び大きくなりました。ハロウィンもささやかに始まり、最近では大イベントになりました。にこトマには毎日毎日笑顔があふれています。毎日のどの瞬間もワクワク楽しくて、そして時々ビッグなイベントを！という「楽しく豊かな時間」は、次世代の人たちによってこれからも続けられます。新しいにこトマには、変化を恐れることなく新事態に適応し、大事なことを守り続けてほしいと期待しています。さて、1995年から2015年。にこトマは、世代交代も経験し、今年20周年記念の行事を考えています。街のなかに子どもたちの作品や私たちの歴史を届け、来場者も一緒に楽しめるようなワークショップや展示をしようと計画中です。この企画は、京都市立芸術大学の先生と学生さんとのコラボレーションなので、私たち自身も何が生まれるか、ワクワクしています。

また、資金調達の新しい方法として注目されているクラウドファンディングにも挑戦します。仕事でもないのに自ら進んで忙しい目をし、苦しむのだから、そこから喜びを一つでもたくさん見つけることにします！

笑顔の子どもたちの作品と一緒に、秋の京都でお待ち申し上げております。

〈講演要旨〉

患者図書室の変遷と患者さんの意識の変化 from2003

青梅市立総合病院 図書室 司書 家田 史子

本日はこのような場をいただき感謝申し上げます。おそらく今までで一番小さな患者図書室の紹介となると思います。そんな図書室の活動ですが、どうぞお聞き下さい。よろしくお願いいたします。

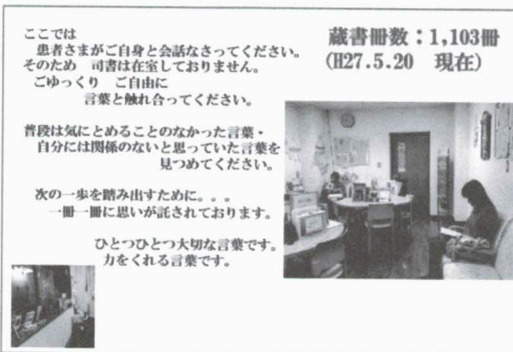
青梅市立総合病院は、562床で26の診療科をもつ、東京の西のはずれにあります急性期中核病院です。災害拠点病院、三次救急指定病院、また、地域がん診療連携拠点病院となっております。

(図1)



患者図書室は、2003年10月に、喫煙所であった場所に作られました。当時の院長からの直接の指導でしたので、管理課の職員1名と私で準備し、開室いたしました。(図1) 院長から「病気のことがわかる図書コーナー」という名前をいただき、その名の通り、医学に関する図書を置くというコンセプトで現在に至っております。常駐の担当者は置かず、入り口にセンサーを取り付けました。図書を室外に持ち出すとセンサーが反応し、音が出るという仕組みになっています。

(図2)



司書が常駐していないということ、プラスに思考変換して、このような言葉をドアに表示しました。(図2) 私は通常医局図書室にありますが、朝・昼・夕と患者図書室に向いて整理等をしております。100冊ほどの図書から始まり、現在1,100冊を超えた登録冊数となっています。分類は独自の9種類の色ラベルで分け、配架しています。

一冊一冊に図書室の思いを込めた装丁をしています。また、新聞の切り抜きやパンフレットをつるしたり、患者さんのメモを飾ったりしました。(図3)

(図3)



ところが、昨年秋頃に、この患者図書室は「がん相談支援センター」になるとの病院の方針が決まり、今年1月、約11年間で作り上げた患者図書室は閉室となりました。現在



(図4)

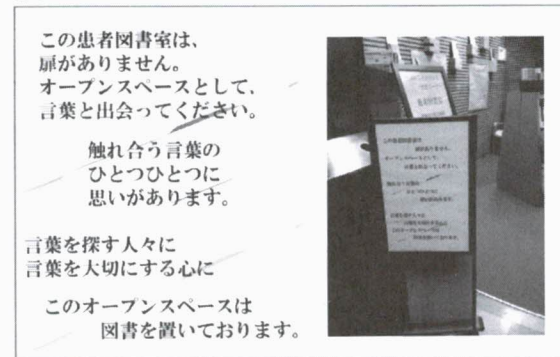


は、このような場所で、患者図書室として活動しています。(図4)

オープンスペースとしての患者図書室のイメージを与えたく、今度は、このような表示板を置きました。(図5) そして、また違う発想で、患者図書室のスペースを作りました。壁面には、シールを貼り、吊した新聞切り抜き、壁のレンガの隙間を利用し、オブジェとして図書を配架しました。PCの梱包に入ってくる段ボールを利用して作りました。落ちてても軽いので患者さんに安心です。

(図6) 次に、図書の配架の工夫です。奥側には、見えないように書庫を斜めに配置し、婦人科や心の図書・そして、認知症などの介護の図書を置いてあります。出入口付近には、動物の図書や予防に関する図書を置き、ちょっと見てみようかという興味のある背表紙を並べてます。テーブルには、糖尿病に関する図書と当院の病院年報を置きました。なぜ糖尿病かといいますと、受診の患者さんが血糖値などの記録をよくこのテーブルで記入されているからです。(図7) 少しゆったりとした椅子の前には、子どもに関する図書を置き、お子さんを座らせながら手にとっていただけたらと考えました。そして、座られる椅子のそばにはこれらの言葉を貼ってます。(図8)

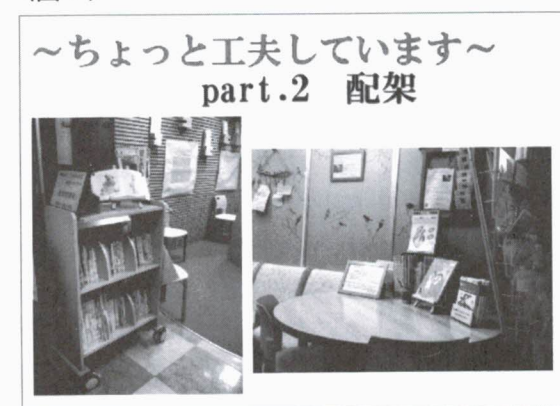
(図5)



(図6)



(図7)



(図8)



奥の椅子の壁：

「片隅に腰をおろし 心の片隅と対峙する。見えるのは何？ 語らうのは誰？」

入り口の椅子に座った時の視線の先：

「途方にくれたら 休めばいい。迷ってきたら 立ち止まればいい。

苦しくなったら 腰かけたらいい。ひとつの椅子はひとつの安堵」

奥の椅子の真ん中に座り下を向いた際に目に付く場所：

「うつむく瞳に底辺が映る。まだ底辺ではない。

底辺までの余白に傲慢だった己を記す。」

開かずの窓からもれる光の窓辺：

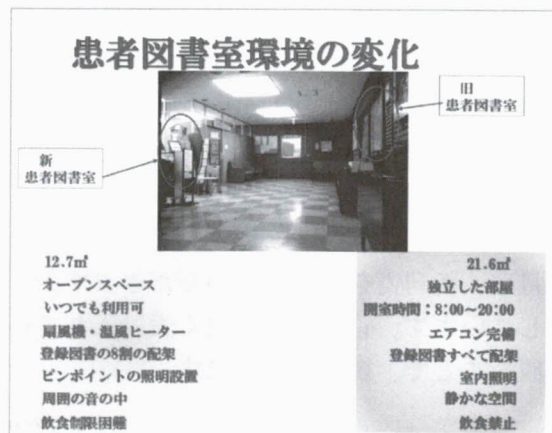
「様々な隙間をさがして 陽射しの手がさしのべられて

ピンポイントで背中も心もあたたまる。 感謝です。」

このように新旧の患者図書室は、病院の考え方・世の中の意識の移り変わりにより変化しました。その環境変化を対比してみました。(図9)

狭くなったり個室でなくなることは、一概に患者図書室の退行とは考えるべきではないということをお伝えしたいと思います。オープンスペースになったことにより、狭いにもかかわらず、多くの患者さんをご利用になるのです。「今まで入るのに抵抗があった。」

(図9)



と患者さんが言っておられました。気軽に医学の図書を見られるようです。

旧患者図書室では、開室してから、1年に一度9月に、蔵書点検を実施していました。利用がそれなりの形で安定してきましたが、紛失図書は毎年ありました。昨年26年は、引っ越し騒動のため実行できませんでしたが、10年間の紛失図書のデータがあります。紛失冊数の変化だけでなく、どのような図書が紛失するのかが患者さんの気持ちを表していると思っています。一般的な図書から、切実に関わり合う図書を持ち帰っています。ということは、患者図書室で情報を求めることの必要性を証明していることだと思っています。2003年から2006年くらいまでは、公共図書館と同じような図書を持って行かれたと感じます。それ以降は、病院図書室ならではの図書の紛失のように思えます。病院図書室が認められてきたことと平行します。今、オープンスペースになった状態では、どのようにしていくか思案しています。



このような状況になりましたが、旧患者図書室でのふれあいの様子を話させていただきます。当初喫煙所であったことや土地柄から、朝整理に行きますと、居場所として利用していたおじさん・おばさん達が雑談をしています。1～2年くらいは、みなさんいらしたと思います。「なんだこんな本なんか読まねえよ。」「新聞はないのか」「本なんかもってかれるよ!」「つまんねえ本ばっかだ!」など、背中にあびせられました。

私は、患者図書室は、そう簡単に認められたり定着するものではないと覚悟しておりました。忍耐だと思ってました。せっかくいただいた患者図書室の場を無駄にしたくないという気持ちが大きかったので、そのような反応は苦にはなりませんでした。当時では馴染みのなかった「ホスピタルコンシェルジュ」の勉強をし、接遇に気を配りました。

清潔・整頓・人の息を感じる空気・和みを欠かさずに続けようと思いました。背筋をのばし、患者図書室を守り続けました。するとそのうちひとりふたりと、図書室に入って来られるようになりました。入院患者さんです。午後や夕方や休日でした。「やっと歩けるようになったので、ここまできたら本があるから、うれしくなったのよ。」と、歩き方の図書を読まれてた患者さん。「最初、長い本は全部読めなかったけど、今度は全部読みました。「愛の言葉」病室のみんなにもみせました。」という精神病棟の若いお嬢さん。「友達のお見舞いにきたら、図書室に行けばいい本みつかると、行けばって言われて、来ました。「天使のみつけかた」って本がいいと思った。ほんとに天使いるのかな。。。と、15歳の外国人の娘さん。「本がやぶれてるよ。」「本の中に線がひいてある。」「だれかが、本持って行ったよ。」「この図書室で、ごはん食べてる人がいる。子ども連れのお母さんは、この中では食べちゃいけない。って言い聞かせてるのに、いい大人が堂々と食べてる。」このように言動に患者図書室への肯定感が現れてきました。

図書は、毎年6月と11月に、新刊書を購入していただきます。1回20冊くらいで3万円前後です。選書は、私がしています。管理課では快く受け入れていただいております。最新版の薬に関する図書を置くことで、新鮮に感じます。

2009年頃に地域医療連携室の設置のために患者図書室を仮の場所として利用することとなり、3ヶ月ほど閉鎖したことがありました。すると、事務室へ患者図書室への問い合わせの電話や「患者図書室はどこに移動したのか?」と尋ねる患者さんが毎日いたとのことでした。このことによって、逆に、病院職員の方々に患者図書室の活動を知ってもらえることとなり、職員の方々も利用してくれるようになりました。

患者図書室で、テーブルを拭いたり図書の整理をしていますと、なんとなく、患者さんが話されます。「毎回同じことばかり言われるんだけど、覚えてくれてないのかなあ。。。先生もたくさんの患者さんいるから、しかたないか。。。とつぶやき風の中年男性。ご自分の疾患の図書を手にしておりました。検査の結果表を見ながら、「この記号は、なんだね? あんたにわかるかい?」と、不安そうにのぞきこむおじいさん。「今日は妻が定期検診です。今度の薬はあっているみたいで、具合がいいんですよ。」と、微笑んだ定年を迎えられた年代のだんなさん。奥さんの疾患の闘病記を読まれていました。「こどもが喘息の発作

で。。。』と何日も続けて、朝早くから、在室されていたお父さん。ご自分の文庫本を持ってきてました。ある夕方6時くらいでした。80代のおばあさんが検査の図書調べておられました。事情を伺うと、「先生がこの数値が高いから薬を出しておくからって言われたんですけど、何でその数値が高いのか、それはどこが悪いことなのかって聞けなくて、調べようと思ったとのことでした。分かりやすい図書を紹介いたしました。「あーよかった。これで病院来たって感じがしました。」って言われて帰

られました。「医者は完治とか言うけど、おれにとっちゃ美味しいもん食べられてちょっと旅行できたら、それが完治なんだけどさ。本読んだって、おれの病気はいいことなんか書いてないよ。読めば読むだけ、ああだめなんだってね。でもさ、なんかあるかなって、探しちゃうんだよ。」膵臓がんの患者さんでした。交通事故で歯を欠損された患者さんが、最新の再生医療を探すから、専門的な資料がほしいと頼まれました。医者と対等の情報を持つことでぼくの治療に未来が見えるからね。」と笑ってました。

認知症の奥様を介護され、看取られてから、認知症の患者会を立ち上げた方がいらっしやいます。この患者図書室にある認知症に関する図書に興味をもってくださり、市の図書館の認知症リストの中にこの患者図書室の蔵書も参加させてもらいました。患者図書室にとっても関心を寄せてくださり、この患者図書室の蔵書に大きな力をいただいております。他の患者図書室にも行かれているそうです。

2007年に一冊のノートを書いてみました。少しずつ患者さんがいろんなことを書いてくれるようになり、現在5冊目となっています。(図10)

「精神科に通院していて、そのたびにここに寄ります。本は読まないのですが、この部屋にすることが力になります。別の病院を紹介され、もう来れなくなるので、さみしいです。」血液内科の女性の患者さんは、「ここにはいい本がいっぱいあるから、お見舞いに来る人に宣伝しちゃったわよ。闘病記が一番の医学書よ。」って話されました。「車椅子で図書室に入り浸り、看護師さんにどこに行ってるのって聞かれるのよ。」って、ノートを書いた患者さん。何人利用しているかという事ではなく、ひとりでもここに來られて、何かを感じてそれぞれの思いと向き合っただけだったらいいと、そんな空間を作りたいと考えていました。そして、ご自分で知ることのできるものを、病を受け止める機会に気づいていただく扉を、患者さん自身が開けてほしいと願っていました。

10年かけてある程度安定した患者図書室ができたと思いました。また、新しい場所は、これから始まります。状況や取り巻く環境が違います。工夫の仕方も考え方を変えなければいけないと思っています。どれだけかかるかわかりませんが、どんなに小さくてもひとつの椅子としっかりした情報の提供を惜まなければ、どこでも患者図書室は作れます。そこには、情報の大切さを知っている人間が細く長く関わり続けることが必須条件であるはずだと信じ、活動していきたいと思えます。

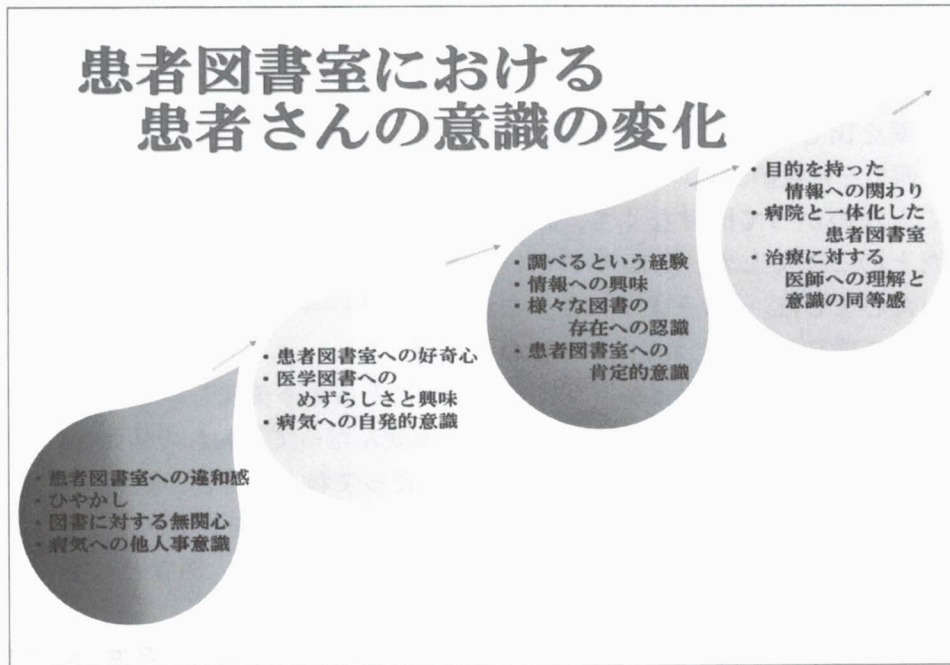
(図10)





ここに患者さんの患者図書室に対する気持ちの変化を、私なりに表現してみました。(図11)

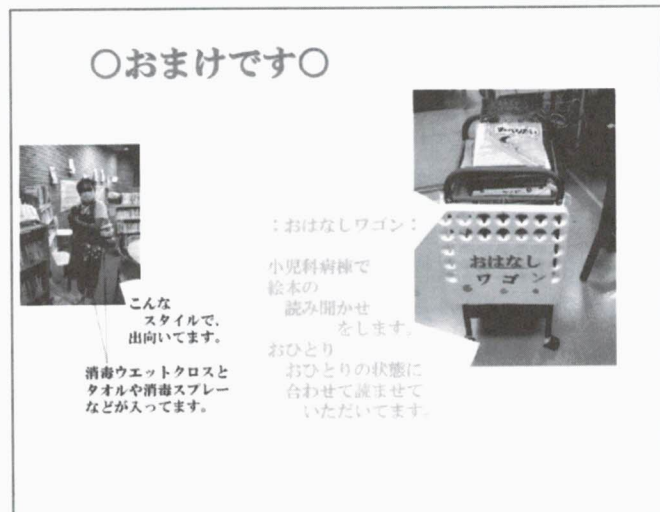
(図11)



最後になりましたが、小さな図書コーナーを小児科外来待合室や病棟の談話室などに作りました。小児科外来には、おもしろい絵本を選書し、談話室・ラウンジには、患者さんからの寄贈の図書を置いています。産婦人科病棟にあるよもぎ文庫には、小説に加えて育児・出産に関する図書も並べています。

おまけですが、こんな格好で院内を歩いております。(図12) お話しワゴンは、小児科病棟の患者さんに読み聞かせをするためのワゴンです。以上、お聞き下さりありがとうございました。

(図12)



## 〈講演要旨〉

# 当院における患者図書サービスの現状と課題

千葉メディカルセンター図書室

成毛モモ

### 千葉メディカルセンター 及び 病院図書室のご紹介

当院は、2011年「J F E 健康保険組合川鉄千葉病院」から「医療法人社団誠馨会」に事業を継承し、「千葉メディカルセンター」と名称変更しました。その後、旧施設の老朽化に伴い、新棟を建設。2014年11月末に病院全体の引っ越しを行い、12月1日、新病院をオープンさせました。病床数315床の急性期病院で、長期入院の患者さんはおそらくあまり多くありません。

隣接地には系列施設である千葉中央看護専門学校があります。看護学校も、病院と同時期に建て替えを行い、新施設へと引っ越しました。どちらもまだ新築して一年に満たない新しい施設です。

病院図書室は四階の管理部門の中にあります。敷地面積147㎡に、単行書約11000冊、雑誌132誌(国内)+27誌(国外)を所蔵し、図書館システムも導入しています。担当者は常勤1名・パートタイマー1名の計2名で、患者図書コーナーと看護学校図書室も兼務しています。

病院図書室は患者さんにも利用していただいかまわらないのですが、新病院になってからセキュリティが強化され、外来区域以外は職員IDカードがないと入ることができなくなりました。入室には総合案内で専用のカードを借りるか、スタッフの誰かに付き添ってもらする必要があります。

看護学校の図書室も、病院図書室担当者が兼務しています。こちらも一般公開できればいいなとは思っているのですが、病院同様、IDカードがないと建物に入るのも自由できません。

### 当院の患者図書サービスのご紹介

新病院設立の際、患者図書サービスとして「患者図書コーナー」を新設しました。サブエントランスすぐ脇、1階売店の隣、通路へだてて院内薬局の向かいに位置しています。イトインスペースも含め47㎡、書架は2つという、ごく小さなコーナーで、9時から14時は外来診察待ちや薬待ちの患者さんであふれています。

オープンスペースなので土日でも利用できますが、売店の営業時間(8時～20時)以外はシャッターが下りて、イトインスペースも含めすべて締め切られます。病院図書室も担当者は二人いても実質シフト制のような状態ですし、ボランティアさんもおられませんので、現在常駐者はおられません。

現状では、このコーナーが患者図書サービスのメインとなっています。

患者図書コーナーで利用できる資料は、閲覧用図書(貸出不可)185冊と、製薬会社が発行しているパンフレットです。閲覧図書は病院図書室の蔵書の一部を移動しました。パンフレットは受け入れを中止したのものも含めると223種あり、製薬会社9社に発注、一ヶ月に約1500部のペースで受入・補充をしています。



## 患者さん向けのパンフレットについて

患者図書サービスにおいて、製薬会社さんの発行するパンフレットを使用しているところは他にも多数あるかと思えます。今回はそれについてちょっと詳しくお話したいと思えます。

まずパンフレットのメリットとして、そのほとんどは無料で入手できます。そのため、紛失や欠品に神経質になる必要はなく、担当者ができる範囲で始められます。補充が間に合わなくても大きなクレームになることはありません。担当者は必要ですが、常駐する必要もありません。また、イラストも多く簡潔で、家に持ち帰ってゆっくり読むことができますので、普段活字を読み慣れていない方でも気軽に利用できます。

経費もかからず便利なパンフレットですが、無料でもらっている分、継続的にサービスできる保証がないというのが難点です。担当のMRさんが交代して発注・納品がスムーズにいかなくなることもあります。また、ほとんどの製薬会社はHP上でPDFを公開しているので、「経費削減で冊子印刷を中止します」という事がないとも限りません。

毎月大量に補充はしていますが、お持ち帰りいただいた資料が有用に使われているのかわかりません。持ち帰ったは良いけれど結局読まずに捨ててしまった、なんていうこともあると思えます。

製薬会社さんは様々なパンフレットを発行しています。こんなもの？というようなマイナーな疾患の資料もあつたりします。一方でやはり網羅性はなく、取り上げられる疾患も限られている上、ごく初歩的な知識しか得られません。

また、常駐者は不在で人件費がかからないと言っても、担当者は必ず整理・補充を日常業務に組み込まなければならず、少なくとも週に1回～2回はざっと点検をする必要があります。図書でも書架整理は必要ですが、パンフレットは薄いため書架も乱れやすいです。

パンフレットの入手方法は、発注先（製薬会社）により異なります。WEB上の注文フォームに希望部数や送付先を入力したり、担当のMRさんにメールで連絡したり、オーダー専用のFAX用紙がある会社もあります。

パンフレットの多くは製薬会社の医療従事者用サイト内にPDFで公開されています。検索エンジンで探すときは「パンフレット」ではなく、「指導箋」「患者用 資材」などで検索するとヒットします。欲しい資料がWEB上で注文できなければ、とりあえずサイト内に掲載されたお問い合わせ先に相談します。多くの場合、数日以内に電話かメールで返信があり、注文方法について指示をもらえます。納品は、郵送またはMRさんの来訪となります。

これらのパンフレットの選定基準は、なるべく広く浅く、を心がけています。選定せず受け入れていると、生活習慣病関連の資料ばかりになってしまいます。同じような資料を見つけた場合、内容、見やすさ、サイズ、発注のしやすさなどを基準にします。

また、製薬会社のサイト内には、自社が取り扱う製品の詳しい解説や治療法などが紹介されている患者さん向け資料が多く見つかります。そういった資料よりも、病気の概要や入門的な資料を優先させるようにしています。

受け入れたパンフレットは、簡単なエクセル表で管理しています。タイトル、受け入れた日付、部数などを記録しています。

配架は、パンフレットボックスに立てて並べています。ボックスには簡単な見出しをつけています。シリーズもので、サイズや背の部分からではナンバーの区別がつかない資料などは、配架前に背に色鉛筆やカラーペンで印を付けておきます。色分けしておけば、在庫チェックの際も便利です。

### 患者図書サービスにおける課題と理想

当院の患者図書コーナーで一番の問題点は、常駐者が不在ということだと思います。病院図書室がほぼシフト制になっているので人員不足ということもありますが、環境的な問題もあります。9時～14時くらいまでは、患者さんが多すぎる上に通路も狭く、とてもごたごたしています。

スペースや設備も十分ではありません。書架は増設できませんので、資料は増やせませんし、コピー機やパソコンも設置していません。また、紛失が懸念されるため、薄く持ち出しやすい医学書などは、現在のところ置いていません。

理想としては、病院図書室や看護学校図書室への仲介ができるよう、わずかな時間でも人員を配置できれば一番良いと思います。ボランティアでも構いません。ただ、そのためにはもう少し環境を整備する必要があります。

常駐者を置くことができたら、パソコンを設置し、病院図書室及び看護学校図書室のOPACを検索できるとなると良いです。図書館システムをいれたことで、WEB上で2つの図書室の蔵書を横断検索できるようになっています。

当院の患者図書コーナーだけではスペース的に限界がありますが、上には病院図書室、隣には看護学校の図書室があります。常駐者が仲介すれば、多くの専門書が利用可能です。

これらが実現すれば、資料的にも、場所としても、医療情報の入り口としての機能を果たせるコーナーになるのではと思っています。

私が患者図書サービスにかかわってみて、難しいなと思ったことがいくつかあります。まず、患者さん側にサービスの需要があっても要望としてはなかなか表面化しないこと。投書箱にわざわざ書いて入れてくれる人は、そうはいません。ですから病院は、患者図書サービスをそれほど重要なものとして考えていないと思います。

そのため、担当者以外の病院スタッフから提案されることもなければ、注文を出されることもありません。予算・人員配置・運営方針などもあらかじめ決まっている訳でもなく、担当者だけが暗中模索しているのが実情です。

皆さんはそれぞれ様々な形で活動しておられるので、感じ方も色々だとは思いますが、私は、患者図書サービスには以下のような意義があると考えています。

まずは、病院内に「癒し」の空間と時間を作ること。これは一般書だけのサービスの場合も含まれます。

次に、医学・健康関連図書の場合は、患者さんが自分の病気に関心を持つきっかけを作り



ます。医師からいわれたことを活字で再認識することで、医師の説明を補助する役割を果たします。

また、自分でも調べて納得したい！という患者さんの欲求を満たすことで、患者さんの不安の軽減、気持ちの安定につながります。

以上のようなことが、スムーズな診療の手助けになりうる、と思うのです。

「先生に、ここに来れば資料があるから見ておいでって言われた」

「先生にいろいろ説明されたけど、よくわからなかった。でもこの資料を見て少し分かった。じゃあこのことについて、次の外来で先生に聞いてみよう」

「落ち込んでいたけど、少し気持ちが軽くなった」

わたしはこんな風に使ってもらえる図書コーナーが作ればいいなと考えています。簡単なようですが、これを日常化するのは想像以上に大変なことだと思います。けれど、こうした流れが定着していくことで、周囲が患者図書サービスの存在と意義に注目してくれるようになることを期待しています。

## 発表を終えて

今回は、患者図書サービスを長年続けてこられたお二方の講演を拝聴し、継続は力なり、と改めて感じました。実績も経験もない私のお話が皆さんの参考になるだろうかと思いつつも、患者図書サービス始めの一步を踏み出した一つの事例として、ご紹介させていただきました。

発表後、いくつかご質問やご意見をいただきました。製薬会社から頂くパンフレットについては、それにかかるバイアスについて貴重なご意見をいただきました。確かに、これらパンフレットだけを参考にしていただくには、医学情報として情報量・信頼性ともに十分ではありません。あくまで病気に関心を持つきっかけとして利用していただき、医療者に質問したり相談したりする材料として使っていただければと思っています。

また、病院図書室と患者図書室の資料の違いについてご質問もありました。患者図書サービスでは、一般の方でも読みやすくわかりやすい資料を揃えるのが基本です。ですが私はそれに加え、患者さんがもっと簡単に看護学校や病院の図書室の資料を使えるようになればと思っています。患者さんが自分の病気について本気で調べたいと思えば、パンフレットやインターネットだけでは足りません。医療者向けの専門書や医学文献の中にも、読みたいものが沢山あるはずですよ。

患者図書サービスを病院に根付かせるのは、一朝一夕ではできません。今できることを模索し、ほんの少しずつでも、患者さんに利用されているという実績を積み重ねていく。まずはその一步から始めたいと思っています。

## 〈参加記〉

# 全国患者図書サービス連絡会講演会

獨協医科大学図書館

森 戸 重 男

今回の講演会では、京都大学医学部附属病院小児科の「にこにこトマト」、青梅市立総合病院の「病気のことがわかる図書コーナー」、千葉メディカルセンターの図書室と「患者図書コーナー」の3題について、興味深いお話を伺うことができました。

まず、「にこにこトマト」については以前から活動自体は知っていましたが、お嬢様の病気がきっかけで活動を始められたことや、病院のスタッフへの働きかけ、活動を拡張するための工夫をされたことなど、20年間という長い期間続けて来られた理由がよく分かりました。普通は子供が入院したというだけで狼狽えて何も手に付かなくなってしまうと思いますが、「お子様の病気のしんどさに比べれば何でもない」との思いで頑張ったことや、阪神・淡路大震災の直後に設立されたこと、設立当初には病院や職員からぞんざいな扱いをされたにもかかわらず、諦めずにやり通したというお話には涙が出ました。活動が認められてくると、力強い仲間が加わり、色々知恵を出し合い、文庫に加えて、お話の会、コンサート、ハロウィン、クリスマス、楽しいイベントも増えていきました。かつての苦勞も良い思い出になったことと思います。「泣くのが自然な時は泣いて、泣くのが辛くなったら笑いたい。自然でいられるのが幸せ。」という気持ちが「にこトマ」を支えていると感じました。

次に、青梅市立総合病院図書室ですが、語り部の方から昔話を聞かせていただいているようなとても心地よい雰囲気の中で、これまでやってこられた工夫や苦勞などを聞かせていただきました。35年間勤務されたそうですが、気づきのための言葉や隙間の利用、患者さんの声(ノート)といった工夫が感じられます。特に言葉に感動しました。本にブックカードで貼られた言葉が胸に刺さります。「ページをめくると知らない世界感が広がってほんの数秒前と違う心がある。」「ぼくのほくろはままと同じところにあるよ。ぼくの親指のつめね、ばばと同じ形をしているよ。ありがとね。ぼくにくれて。だいじにするからね。」そんな言葉はホームページの中にもありました。「様々な隙間をさがして陽射しの手がさしのべられて ピンポイントで背中も心もあたたまる。感謝です。」きっと落ち着く図書室なのでしょう。

最後は、千葉メディカルセンターの患者図書室です。新しくなった病院図書室は、ベテラン司書とアルバイトで運営されており、セキュリティが厳しくなったことで患者さんには使い勝手が悪くなったそうですが、患者図書コーナーは、狭いとはいえ売店の隣にあり、イートインスペースを併設していることで利用者が多く見込まれます。製薬会社提供



のパンフレットや一般向け医学図書等が置かれて気軽に利用される反面、予算はないため病院図書室予算から捻出し、人が常駐していないことから書架の乱れやパンフが有用に利用されているのかは不明だそうです。

おわりに、いつも新聞や雑誌、インターネットの情報を元に、様々な患者図書サービスを探して、講演を依頼や会場の準備をされ、会報を発行していただいている役員の方々に感謝申し上げます。

## 〈参加記〉

### 本のちから

羽村三慶病院 理学療法士

寺 島 佑

僕の勤めている病院には本が一冊もありません。

外来患者は待ち時間の間手持ち無沙汰にしているし、入院患者はテレビ以外にろくな娯楽がありません。

病院の環境をもっと明るくしたい。漠然としたその思いは、患者図書サービスというものを知ってから明確な形を持ち始めました。

本のある空間というのは不思議と心が落ち着きます。

僕自身、待合室が一つの休憩所のような雰囲気を持っている病院にお世話になった経験があり、そこにはたくさんの本がありました。

今回の講演では、そんな病院+アルファの空間作りに尽力されている三名の方からお話を聞くことが出来ました。

小児を対象として、図書やイベント企画など様々な取り組みをされている神田さん。

「辛い時は泣けばいい。泣くのが辛くなったら笑えばいい。

病院に、泣いたり笑ったり出来る材料や環境はありますか？」

とても印象的なお言葉です。

いかに病院内に家と同じ雰囲気を作り出せるか。子供に楽しい時間を提供出来るか。

二十年という長い期間、そのテーマに沿って尽力してきた神田さんの言葉には、とても力強さを感じました。

「本は社会に開く窓」とも言っておられました。

確かに、病院は閉鎖的な場です。そこで過ごす患者もそうですが、ともすれば医療者側も狭いコミュニティの中での生活に慣れきってしまう。

本はそんな自分の世界を広げてくれる。たまには窓を開けて、新鮮な空気を取り込まな

いと笑顔も生まれない。

ああ、自分が目指したいと思っていたのはこれだ。そう思いました。

図書室司書として、たった一人で病院の図書を管理している家田さん。

壁面への掲示や配架方法など、図書室に立ち寄ってくれた人のために様々な取り組みをされているそうです。

家田さんの語る言葉の一つ一つに色がついているような、聞いているだけで心が温かくなる、不思議な講演でした。

何よりも本を、言葉を大切にされている方なんだなあ、と。

あまり広い図書室でないからこそ、患者一人一人のために選び抜いた本を提示する。一冊一冊の装丁にまで気を配る。

その心遣いに深い感銘を受けました。

まだ患者図書サービスを始めて間もないという成毛さん。

いろいろと試行錯誤しながらもスタートダッシュを切った、その決断力を僕も見習いたいです。

患者が気軽に手に取れるようなパンフレットを提示する、というのは眼から鱗の発想でした。

全てが整った所からスタートするのではなく、患者のニーズに合わせて少しずつ作り上げていく。そんな患者図書サービスも素敵だな、と改めて思いました。

お三方の講演を聞き、共通して抱いた感想があります。

それは、「細く長く続ける」ことの重要性です。

ほんの数人のスタッフ、わずかな本から初めても、それを見ていてくれる人がいる。まずは一步を踏み出さないと何も始まらない。

今回の講演で得たものを自分の職場に持ち帰り、いろいろと試行錯誤を繰り返していこうと思います。



## 〈本の紹介〉

東邦大学医学メディアセンター

大橋病院図書室

牛澤典子

全国患者図書サービス連絡会の皆さま、こんにちは。東邦大学医学メディアセンター大橋病院図書室の牛澤と申します。私の職場は小さな病院図書室ですが、受け入れた新刊の中から地域の一般の方や医療職の方に役立つような本をご紹介します。

この書籍案内は、元々 Facebook 上の patient-lib というグループに投稿したものです。こちらの会報にも載せていただけることになりました。少々原稿を修正したものであることをご了承ください。

なお、patient-lib はさまざまな館種の図書館職員が患者市民への健康情報提供について意見交換するものです。公開グループですので、どなたでも読んだり参加したりすることができます。よろしければ覗いてみてください。

Facebook / patient-lib

<https://www.facebook.com/groups/patient.lib/>



やさしいがんの痛みの自己管理 / 武田文和, 的場元弘著

改訂4版. - 大阪 : 医薬ジャーナル社, 2015.8

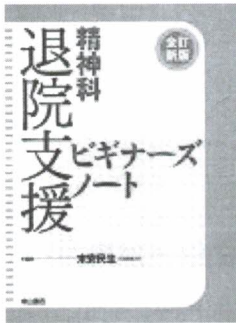
ISBN: 9784753227372 2200 円

「痛みがどうも医師にうまく伝えられない・・・」という方は多いと思います。痛みは患者本人だけでなく、ご家族にもつらいことです。

こちらの本はがんの痛みについてですが、前書きにこうあります。

『“がんの痛みの自己管理など無理、主治医に任せておくほかない”と考えている読者もいると思いますが、痛み治療では患者さん自身にも役割があります。それを果たすためには患者さんが痛みと薬の知識をもち、医師の役割も知り、自分の痛み治療に積極的に参加し、主治医や受け持ち看護師に対して自分の痛みについて発言していくことが、がんの痛みの自己管理を実現させます。すべてのがん患者の痛みからの解放は、世界中の人々の強い希望です。その実現に本書が役立つよう願っています。』

痛みやその治療について知るとともに、病院内のシステムがどのように動いているかを知ることも患者さんやご家族にとって心強いことです。医師に言って対応してもらえなくても、看護師や薬剤師、緩和ケアチームに伝えることで道がひらけるかもしれません。公共図書館にもおすすめです。



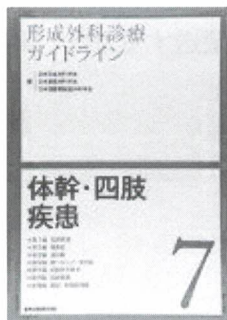
**精神科退院支援ビギナーズノート / 末安民生編集**

全訂新版 - 東京：中山書店，2015.7

ISBN: 9784521741932 2916 円

国の政策として精神科医療の退院支援が進められています。入院期間が1年以上におよぶ、いわゆる社会的入院の約3分の2の患者が地域移行支援の対象者になるとのことです。

医療機関と地域が協働する場合どこから手を付けてよいかわからない、患者・家族の不安が強い、地域に資源がない、少ないなど、困難な課題をもつ方々が地域にいらっしやいます。病院や訪問看護関係の医療職の方、行政の方などに役立つと思います。ぜひおすすめください。



**体幹・四肢疾患 / 日本形成外科学会，日本創傷外科学会，日本頭蓋顎顔面外科学会編**

東京：金原出版，2015.7. - (形成外科診療ガイドライン；7)

ISBN: 9784307257206 3780 円

診療ガイドラインは難しそう……との印象をもつ方が多いのではと思いますが、意外に身近なテーマが多く取り上げられています。たとえば、この本の例。

Q: エステティックサロンにおける除毛術（光，電気分解など）は有効か？

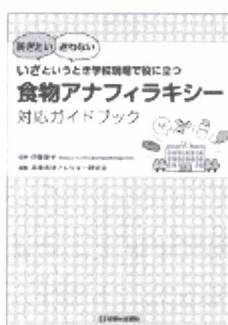
A: エステティックサロンにおける除毛術は永久脱毛ではないので無効である（グレードD）。



根拠・解説 エステティックサロンでの永久脱毛行為は、厚生労働省より違法行為であるという医政局医事課長通知が出されていることと、……(以下略)。

永久脱毛のCMがどこもあふれていて、私の娘たちも興味深々であります。診療ガイドラインでこんなにはっきりとエステティックサロンの施術は無効と書かれています。やはりガイドラインには目を通しておかなければと思わされます。

他に、乳房再建、腋臭症（ワキガ）なども収録。



**いざというとき学校現場で役に立つ食物アナフィラキシー対応ガイドブック / 兵庫食物アレルギー研究会**

東京：診断と治療社，2015.4

ISBN: 978-4787821218 2052 円

『学校で食物によるアナフィラキシーが起こったときの危機管理（だれが何をすべきか）と起こさない安全管理（あらゆる場面を想定した対応策）について可能な限りイラストや写真を使って対応をポイント解説した、学校職員や生徒の健康管理に関わる人全員が共通認識しておきたい知識が満載。』

学校現場での対応が具体的に書かれています。アレルギーのある子ども本人は体調がおかしいと感じたら我慢せず先生を呼んでもらう、先生は子どもを寝かせて養護教諭や校長先生を呼ぶ、養護教諭はまわりに指示を出し、処置しながら医療機関に搬送するなど。対応のための委員会設置やトレーニング方法も。

保健室に必須と思われませんが、公共図書館にもぜひ。



**在宅・施設リハビリテーションにおける言語聴覚士のための地域言語聴覚療法 / 森田秋子，黒羽真美編集**

東京：三輪書店，2014.11

ISBN: 978-4895904742 3888 円

言語聴覚士さんって言葉の問題でお世話になるという認識でしたが、脳損傷後や他の疾患による嚥下障害、その他幅広い患者さんに対応されるということで注目されています。

たとえば胃ろう造設の場面では、『「食べられるのか、食べられないのか」ということが判断される場面に立ち会う機会が多い言語聴覚士。家族への説明の最終責任者は医師であり、治療方針を最終決定するのは家族であるが、言語聴覚士も意見を求められ、心理的サポートを行うべき立場に立つことがある。患者・家族とともに、胃瘻造設の問題に向き合い、痛みを分かち合いながら支援していかなければならない。』

地域で働く言語聴覚士さんのために、公共図書館にこの本があったらいいなと思います。



<コラム>

## 「子どもには、ほんとうの生命を」

国立病院機構 富山病院 (小児科医)

嶋 大二郎

故郷の大手ノート・メーカーが作る学習帳は昔から生き物の写真を使った表紙が人気で、全国の学校から大量注文があったらしい。ところが、近年になり「気持ち悪い」と忌避する親から学校への苦情が増え、売れ行きにも影響が出たとかで、製造を取りやめたことが数年前ニュースになった。しかし、反論も根強く、今年になって限定的ながら復活させたことがまたまた話題を呼んだ。

私は小児科医。「子どもは泣いて大変でしょう」とよく慰められる。現にそういう面はあるし、泣かさずに診る方が得られる情報がずっと大きいのは事実だ。というわけで、いかに騙し、おだて上げて診察に持ち込むかが小児科医の技量と心得ている。手段はいろいろ。机上にパソコンのある現代、私はスライド仕立てで動物や植物など生物の写真を見せ、クイズ形式も入れてこちらのペースに引き込むのが常套手段だ。

さて、そうしていると、ケモノではほぼ問題は起きない。ところが昆虫や両生類になると、子どもは興味津々なのに、傍らで「気持ち悪い」と水を差す母親が近年とみに多くなったと感じるのである。まれに子ども自身が気持ち悪がることもあるが、その多くは「昆虫が苦手」の母の影響によるように思える。

都会の子は自然に接する機会が少なく、生き物が苦手になったと言われて久しい。しかし、今は地方も同じ。県都富山市とは言いながら、外れに位置し、緑豊かな田園・丘陵地帯に恵まれた私の病院にいてさえ、その変化をつくづく感じるのである。暴行や殺人などの犯罪は古来のものだが、近年その数が全国満遍なく増えたと感じるし、何よりもその言い分が「恨み」や「憎しみ」ではなく、「殺してみたかった」などという理解しがたいものが多い。触れた経験が少なく、生命として超えてはいけな一線が分からなくなっているのではないだろうかという印象を持つのである。

飛躍が過ぎるかも知れない。が、私は、生き物も格闘も全てバーチャル化され、直に生命に「触れる感覚」や危害を受ける「痛み」を経験せずに子どもの時期を過ごすようになったことが大きいと思う。スマホもゲームも、今や都会も田舎も時間差無く手にすることを考えれば、身の回りに普通にいる生物を気味悪がる事実も、理解しがたい犯罪が全国等しく増えている現実も、説明がつくように思うのだ。

少子高齢化や環境破壊など私たちを取り巻く危険はいくつも指摘されるが、人間が加速度をつけて自ら生命との接触を断ちつつあることに何より大きな危機感を持つ。

子どもには、人工産物のペットではなく、自然の生命に親しんで育てて欲しい。

## 全国患者図書サービス連絡会会報投稿規定

1. 本会会員（購読会員を含む）は誰でも投稿できます。
2. 本会報は、患者図書サービスをめぐるいろいろな話題や問題、そしてこれらと関係する論文、報告、資料などを掲載します。
3. 投稿原稿の採否は、役員会で決定します。
4. 投稿原稿の長さは問いません。
5. 投稿原稿の執筆・提出要領は次の通りです。
  - ①用紙は問いませんがワープロソフト搭載のパソコンを用い、また手書きの場合は楷書で編集者が読みやすい文字で書いてください。
  - ②パソコンで作成した場合は、メールの添付ファイルでお送り下さい。
  - ③表紙頁には表題、著者名、所属を明記し、更に、執筆者の所属、郵便番号と住所、電話番号、FAX番号、メールアドレス等を明記してください。
  - ④外国人名は分かるものについては原語を付け、適当な日本語訳のない言葉も原語を用いてください。
  - ⑤原稿に付随する図や、表、写真は図1、表1、写真1などの番号を付け、本文とは別に添付し、本文中の該当箇所に（図1）などと指示してください。原稿を含め、投稿されたものはお返ししませんので、特に手書き原稿に添付する貴重な写真などはコピーをとってください。返却を希望されるときは、その旨お伝え下さい。
  - ⑥参考文献記載の様式
    - i) 記載順序は出処順とし、1)、2)、3)の書式に従って下さい。
    - ii) 雑誌の場合は、著者名、標題、雑誌名、発行年;巻(号):開始ページ-最終ページ、の順に記載。
    - iii) 単行本の場合は、著者名、書名、版表示、(シリーズ名;シリーズ番号)、出版地:出版者;出版年、開始ページ-最終ページ。
6. 原稿送付先：メール添付=yamamuro@tb3.so-net.ne.jp  
郵送の場合は 〒236-0053 横浜市金沢区能見台通16-16 アイネス能見台101 宮田方  
全国患者図書サービス連絡会  
(2012.7.31 改訂)

### [編集後記]

昨年7月に開催された講演会の報告号をお届けします。

前年度からの会報発行が遅れに伴い今号も大変遅れての発行になりましたことを、講演会でのご発表と原稿を頂きました各講師の方々をはじめ、各会員の方々に深くお詫び申し上げます。

また、講演会開催地から遠路のため参加しにくい会員の方々のお役に立てば幸甚です。編集部では「会員の声」、「事例報告」など広く会員の方々からの投稿をお待ちしています。

よろしくお願い致します。

(編集子)





電子ジャーナルホスティングサイト

# PierOnline ピアオンライン

PierOnlineは国内の学術出版社が発行する医学・薬学・看護系の学術誌を電子ジャーナルとして提供するホスティングサイトです。ご利用は提供される電子ジャーナル1誌ごとに年間契約が可能です。冊子体（本誌）の非購読者は論文単位でのPayPerView購読が可能です。

## 「外科」「内科」「整形外科」「別冊整形外科」「胸部外科」がセットになった「南江堂オンラインJournal」に「がん看護」が追加されました！

### 「南江堂オンライン Journal」の特長

- ・エンバゴはありません。いつでも最新号から閲覧できます。
- ・増刊号や増大号ももれなく閲覧できます。
- ・同時アクセスは無制限です。複数人が同時に利用することができます。
- ・写真や図も大変鮮明にご覧いただけます。
- ・全文検索により、もれの無い検索を実現。
- ・気になった論文をブックマークして、好きな時に簡単に閲覧できます。
- ・バックナンバーが充実しています  
ご契約と同時に、PierOnline に収録されている南江堂オンライン Journal のバックナンバー全てが閲覧可能となります。「外科」、「内科」、「整形外科」、は 2001 年から、「別冊整形外科」は 2000 年から、「胸部外科」は 2004 年から、「がん看護」は 1996 年（創刊号）からご覧いただけます。



### 「南江堂オンラインJournal」を購読できるのはPierOnlineだけです！

Content Solutions Company  
**SUNMEDIA**

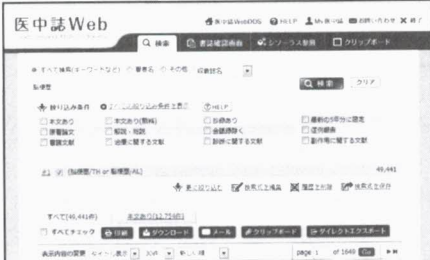
株式会社サンメディア

e-Port

e-mail : pier@sunmedia.co.jp

本社 〒164-0012 東京都中野区本町 3-10-3 PORT ビル  
Tel : 03-3299-1575 Fax : 03-3374-1410

大阪オフィス 〒550-0003 大阪市西区京町堀 1-3-3 肥後橋パークビル 4F  
Tel : 06-6444-7720 Fax : 06-6444-7730



### 国内最大級の医学文献情報データベース

# 医中誌 Web Ver.5

デモ版 <http://demo.jamas.or.jp/>

### Database

国内発行の医学・歯学・薬学・看護学等の定期刊行物のべ約6,000誌から収集された膨大な医学文献情報をインターネットで検索できます。検索対象は1977年から最新データまで約1,000万件。

### Interface

直感的に検索できる検索インターフェースをご用意しています。また、医学用語ソーラスや検索履歴を使い、より適合性の高い検索結果を得ることができます。

### Link

医中誌Webから電子ジャーナルや全文PDF等のフルテキストサービスへのリンク件数は約280万件、うち約88万件は無料で公開されています（2015年4月現在）。また、図書館システムとのリンクも行えます。

### Customize

大学・病院・企業・公共図書館などそれぞれの環境に応じたご利用機関ごとのカスタマイズ、「My 医中誌」による個人ごとのカスタマイズが行えます。

法人向け「医中誌 Web」

1年間の固定料金制。同時アクセス数1-2で250,000円（税抜）～

個人向け「医中誌パーソナル Web」

1ヶ月8時間利用で2,000円（税抜）～

特定非営利活動法人 医学中央雑誌刊行会 <http://www.jamas.or.jp/>



〒168-0072 東京都杉並区高井戸東2-5-18

TEL:03-3334-7575 FAX:03-3334-0497 E-MAIL:info@jamas.or.jp





新刊



## 多様性と出会う学校図書館

一人ひとりの自立を支える合理的配慮へのアプローチ

野口武悟（専修大学教授）・成松一郎（専修大学講師）編著

A 5判 184p / 本体：1,800円＋税 / ISBN978-4-902666-35-9 C0037

学校図書館法の改正などもあり、近年、学校図書館という場を「再発見」しようという動きが始まっています。

本書は、学校図書館が、一人ひとりの子どもの特性や思いに寄り添いながら、自立的な生き方をサポートするための基本的な考え方を提案し、それぞれの現場で「合理的配慮」を実践していくためのヒントやアイデアを提供する書籍です。

好評既刊



## からだといのちに出会うブックガイド

健康情報棚プロジェクト  
＋  
からだこころの発見塾

B 5判 244p

本体 2,400円＋税

ISBN978-4-902666-19-9

図書館員、ジャーナリスト、医療・患者会関係者などがキーワードごとに選んだ「読みたい」「読んでほしい」「棚に揃えたい」絵本・エッセイ・写真集など179冊を紹介。

重版出来



## 一人ひとりの読書を支える学校図書館

—特別支援教育から見えてくるニーズとサポート

野口武悟・編著 A 5判・222p / 本体 2,000円＋税 ISBN978-4-902666-24-3

特別支援学校、特別支援学級、通常学級に在籍する、特別なニーズのある子どもたちに豊かな読書活動を提供している学校図書館の実践を報告するとともに、ニーズに対応したサポート方法・メディア活用例を解説します。

読書工房

〒171-0031 東京都豊島区目白 3-13-18 ウィング目白 102

電話：03-5988-9160 ファックス：03-5988-9161 Eメール：info@d-kobo.jp <http://www.d-kobo.jp>

全国患者図書サービス連絡会会報 ISSN 1334-2937

第22巻 第1・2号（通巻77号） 2016年1月31日発行

発行：全国患者図書サービス連絡会 (<http://kanjatosho.jp/>)

〒939-2692 富山県富山市婦中町新町3145

独立行政法人国立病院機構富山病院・気付

連絡先：Email：info@kanjatosho.jp

yamamuro@tb3.so-net.ne.jp

印刷所：株式会社 中島印刷所

〒232-0026 横浜市南区二葉町4-39

年会費は下記へお願いします。

振込口座 00590-4-9311

加入者名 全国患者図書サービス連絡会

年会費・購読料共 4,000円